

なつふじ／マメ科のつる性植物。本州から四国九州の暖かい山地に自生する。7月から8月にかけて、長さ15センチほどに総状花序を伸ばし、白い蝶形の花を多数咲かせる。花も葉も藤に似ている。

らしく

自分らしく、
粋なくらし

CLOSE UP

映像・メディア芸術の魅力

広島エイト倶楽部

アマチュア映像作家ならではのテーマに取り組み、
地域文化の発展にも貢献

NPO法人広島アニメーションシティ

広島のメディア芸術の振興に取り組む

市民活動で映画製作をする会

映画を通し市民の視点から、
身近な社会問題を考えるきっかけ作りを

連載

▶Hmi助成支援団体のご紹介ほか ▶人材バンク 名人 宝人 達人 ▶ようこそ!公民館へ〜安佐南区内公民館〜

▶らしくレポート ひろ記者が行く・心をつなぐ広島の紙芝居文化 ▶らしくコラム・メディアとして「映像」の存在感を問い直す

▶情報の森 ▶プラザ通信



アマチュア映像作家ならではの テーマに取り組み、地域文化の発展にも貢献

CLOSE
UP

映像・メディア芸術の魅力

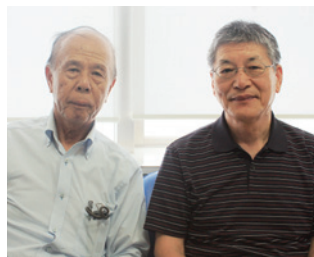
今回は映像・メディア芸術などを通してさまざまな活動をしている団体を紹介します。

広島エイト倶楽部

<http://www.h8c.org/>

技術向上に努め楽しみながら撮る

昭和33年に広島市西区横川の開業医松原博臣^{まつばらひろおみ}さんを中心に「みんなで映像づくりを楽しもう」と5人が呼びかけ結成したのがアマチュアビデオクラブ「広島エイト倶楽部」です。8ミリフィルムにちなみ名付けました。「国産の8ミリビデオカメラ大衆機が発売されたのは昭和32年、まだ民放はラジオの時代。昭和34年に初めて公開上映会を開いた時は、映像が珍しい時代なので120人も集まり驚いたそうです」と三代目会長を務めた佐々木博光^{ささきひろみつ}さんは、発足



▲ 三代目会長の佐々木博光さん(左)と
四代会会長の田中隆正さん(右)

当時の会員OBから聞いた話をしてくれました。

会員は個人の自由な発想で楽しんで撮影し、表現したいことを作品にしています。活動の中で地元テレビ局で活躍しているカメラマンやディレクターからも撮影、編集を学び技術の向上

にも努めてきました。制作過程がテレビ局に取り上げられ放送されたこともあったそうです。

広島をテーマに作品を作り続ける カンヌ国際アマチュア映画祭に入選も

会員本人や家族に被爆者が多いことから、原爆や平和をテーマにした作品に積極的に取り組んできました。そのうちに、ヒロシマから映像で世界平和へ貢献する理念が会員の中に芽生え、伝統になりました。



▲ 会員の皆さん

被爆から30年の昭和50年に始まった「ヒロシマ国際アマチュア映画祭」は同会が深く関わっています。映画祭の理念は「広島エイト倶楽部」の理念と一致していたため運営に携わり、新藤兼人監

督を審査委員長に迎え開催。第1回は国内外から199点もの作品が集まりました。

その他に、昭和41年に松原さんが宮島の古式風俗をテーマに撮った作品「宮島」がカンヌ国際アマチュア映画祭で銀賞を受賞。昭和54年には広島東洋カープ初の日本一をテーマにした作品を作るなど、原爆、平和作品以外にも広島ならではの題材を取り上げ、各方面から高い評価を得たことにより昭和57年には広島文化賞も受賞しました。



▲ 昭和57年に受賞した
広島文化賞

平成25年の結成55周年事業では「横川の今昔」をテーマにシンポジウムを開催。作品を横川シネマで上映し地域住民と交流しました。平成28年2月には、変貌を遂げている広島駅周辺をテーマに撮った「生まれ変わる愛友市場^{あいゆういちば}」が、東京で開かれた映像コンテストに入賞。かつて毒ガスを製造していた大久野島や、多くの被爆者が運ばれた似島など戦争の「負の遺産」もヒロシマならではのテーマとして取り組み、毎年全国コンテストに入賞しています。

現在は22人の会員で活動しており、西区三篠公民館で映像編集教室を開いたり、月1回の定例会で会員同士作品を鑑賞・批評し合い、年2回程度撮影会も行なうなど親睦を深めています。また一般の方を対象にした公開上映会を、今年も11月10日に広島市西区民文化センターで開く予定になっています。

映像の世界は、発足当時の8ミリフィルムからデジタル化し、技術は進歩。その特性を生かして、今後は2年後の60周年に向けて、ホームページも拡充し、8ミリフィルム時代のアーカイブ作品、会員個人作品、全国コンテスト入選作品などをSNSにアップするなど、多メディア時代への対応も検討し、世界中に情報発信していくことを考えています。また、一つのテーマを5年間かけて追いかけるなど、アマチュアならではの強みを生かした作品づくりにより力を入れていきたいそうです。

四代目で現在の会長の田中隆正^{たなかたかまさ}さんは「広島の地で、60年近くも地域を見つめ発信し続けてきた倶楽部の熱い思いを、さらなる未来への発展に向けて伝えていきたいです」と語ってくれました。その力強い言葉に明るい展望を感じました。



▲ 過去節目の年の記念誌



▲ 昭和33年発足時の写真

自分らしく、
粋なくらし

Vol.45
夏藤号
2016.7

contents

- 特集**
- 01 映像・メディア芸術の魅力**
 - ▶ 広島エイト倶楽部
 - ▶ NPO法人広島アニメーションシティ
 - ▶ 市民活動で映画製作をする会
- 05 第14回 Hm助成支援団体決定**
- 06 Hm助成支援団体のご紹介**
 - ▶ こうごまちサロン会
 - ▶ 真電一丁目花の会
- 07 人材バンク 名人 宝人 達人**
 - ▶ 宮原美鈴さん
 - ▶ 箏曲グループ玄恵会 おとぎ組
- 09 ようこそ! 公民館へ・安佐南区内公民館**
- 10 らしっくレポート ひろ記者が行く**
 - ▶ 心をつなぐ広島の紙芝居文化
- らしっくコラム**
 - ▶ メディアとして「映像」の存在感を問い直す
広島修道大学 人文学部 社会学専攻
山里 裕一 教授
- 11 情報の森**
- 15 プラザ通信**



【表紙写真】撮影会の様子

広島メディア芸術の振興に取り組む

NPO法人広島アニメーションシティ

<http://hac.or.jp/>

アニメーションによるまちおこしを 市民活動から盛り上げる

「広島」「アニメーション」「地域コンテンツ」をキーワードに、地域文化の多様性・特殊性を生かした魅力あるコンテンツの企画制作や支援、それらを活用した事業の実施により、広島のメディア芸術文化の振興に寄与することを目的に、平成24年にNPO法人化した



▲ 情報誌広島アニメーションだより
のが「NPO法人広島アニメーションシティ」(略称HAC)です。

昭和60年に始まった「広島国際アニメーションフェスティバル」を、企業、市民の立場から、アニメーションによるまちおこしとして盛り上げていこうと、平成16年に立ち上げた「広島アニメーションビエンナーレ」基金事務局の活動を一部受け継ぎ、平成21年より任意団体として活動を続けてきました。

「平成17年から、広島国際学院大学で、地域におけるサブカルチャー文化の研究に取り組んでいた私は、知人に誘われて任意団体の設立に関わりました。HACとして現在は、アニメーションを中心とした広島メディア芸術文化の振興を図るために、大きく分けて三つの取り組みを行っています」と事務局の谷口重徳さん(広島国際学院大学教授)は語ります。

さまざまな取り組みで情報発信し、 独自のコンテストで地元クリエイターの発掘

主な活動の一つ目は「広島メディア芸術文化プロジェクト事業」。アニメーションをはじめとするメディア芸術に関するイベントの企画・運営、地域のクリエイターの活動を支援し、平成25年

からは広島のメディア芸術を発信する情報誌「広島アニメーションだより」を年3回発行しています。「広島国際アニメーションフェスティバル」の関連情報や、広島のメディア芸術の動向やイベントレポートなどを幅広く紹介しています。二つ目は「宮島文庫プロジェクト(地域コンテンツ)事業」。広島および地域をテーマにした創作表現のコンテストを



▲ 事務局の谷口重徳さん

開催し、地域の魅力を生かしたコンテンツ作品を企画・制作して、地域から物語を発信しており、地元イラストレーターを起用するなどクリエイターの発掘、支援も行っています。三つ目は「ウェブサイト事業」。企画・制作・運営を行いウェブを媒介として「広島」「アニメーション」「地域コンテンツ」について発信しています。

現在、HACは個人、法人約60人が参加しており、クリエイティブ系コミュニティサイトの企画運営や、個人で活動しているアニメーション作家の作品上映会や交流会、講演会や各種イベントに携わり、積極的に地域文化の振興に取り組んでいます。

「HACに関わった人の中からは、プロのアニメーション作家も育っています。しかし地元でメディアコンテンツ事業に関わる仕事は少なく、ほとんどが東京へ行っています。今後の課題としては、地元でもクリエイターとして仕事ができるようにさらに支援し、独自のコンテンツの発信も続けていきたいですね」と、谷口さんは今後について語ってくれました。

「広島国際アニメーションフェスティバル」をきっかけに始まった、地域振興、さらには地域発のクリエイターの育成も担う活動に大きな可能性を感じました。



▲ 瀬戸内海地域の情景や歴史、伝説を新たな物語(ライトノベル)として発信するプロジェクトとして発信するプロジェクトとしてネーミングされた「宮島文庫」



▲ 創作投稿サイト



▲ 第3回みんなのライトノベルコンテスト表彰式

映画を通し市民の視点から、身近な社会問題を考えるきっかけ作りを

市民活動で映画製作をする会

<https://www.facebook.com/citizenmovie/posts/605222066280692>

観る側の視点から、作る側の視点へ 伝わる喜びが、社会貢献にも繋がる

平成23年度に開かれた、まちづくり市民交流プラザ主催の映画製作ワークショップの修了生を中心に平成24年に8人で結成したのが「市民活動で映画製作をする会」です。生涯学習としての側面に重点を置き活動をしています。結成した平成24年には、犬や猫の殺処分問題をテーマにした映画『ちいさな命のゆくえ〜名もなき犬・猫たちのこと〜』を製作しました。

「会を作る経緯は、ワークショップ終了後に、せっかくの機会なので受講生みんなで卒業製作に取り組んでみよう、と盛り上がったのがきっかけです」と語る代表の浜野省三さん。浜野さん自身も、もともとは映画を観るだけの立場でしたが、偶然目にしたプロの映画監督がワークショップで作った短編作品に感動し、映画を作ることに興味を持ちました。たまたまその頃、当プラザ主催の映画製作のワークショップに知人に誘われて参加し、会を結成し映画を製作するようになったそうです。

「映画製作にあたって、市民の立場だからこそ出来る事を、との思いから社会問題を取り上げることにし、数ある社会問題の中でも身近に存在する、犬や猫の殺処分問題を扱うことにしました。ペットとして犬や猫を飼う人は増えてきていますが、いろいろな事情で飼えなくなったり、飼い主の都合で捨てられたりするペットが、その後どのようなのか、目を背けてはいけないと思います。この作品で私たちが何を伝え、感じてもらいたいのか、作品にメッセージを込めて製作しました」。ストーリーはメンバーで考え、実際の撮影は主に週末に広島市内の公民館や、呉市動物愛護センターで行いました。さらに平成27年には『慈〜もう一つのちいさな命のゆくえ〜』を製作。テーマに賛同してくれた広島出身のタレント米光美保さんが出演し、撮影にはメンバーが手弁当で参加しました。完成した作品は、広島市内他で順次公開され、新聞に取り上げられたり、映画の上映要望が増えたり、と話題を呼んでいます。



▲ プロの映画監督による演技のワークショップ

映画製作の中で 社会や自分の考えを見つめ直すことにも

また、会の活動は映画製作だけにとどまりません。実際のプロ映画監督を講師に迎え、俳優を志望する人や映画製作に携わることを希望する一般の人たち向けに、キャストやスタッフとして活動できるためのワークショップも開催。実際にプロの映画監督が指導する現場を体験することで、映画の製作意図、



▲ 代表の浜野省三さん

テーマを参加者自身に深く感じてもらうようにも取り組んでいます。「ワークショップの参加者の中には、実際に放送される企業CMの出演に挑戦したり、俳優を目指して上京した人もいます。参加者に決して押し付けるのではなく、身をもって体験してもらうことが大切だと考えています。また、社会問題は書籍や映像を見て意識を高めることもできますが、映画のテーマとして取り上げ、自分が実際にキャストやスタッフとして関わることで疑似体験もでき、より深く考える機会にもなります。映画を観る立場だけでなく、製作する立場でも社会問題を身近に感じ、意識を高めていくことにも繋がると考えています」。

今後も、自分たちの生活に身近なさまざまな出来事をテーマにした映画を通して、より多くの人に社会問題に関心をもってもらい考える機会を作っていきたいそうです。そして参加者それぞれの道徳観、価値観、人生観などを育む人間形成の場にもなれば、と浜野さんは願っています。映画製作を通して、社会へ問題を提起すると同時に、人として成長できる場を作ることに挑戦している活動に、大きな可能性を感じました。



▲ マツダ財団助成事業 青少年育成プログラム映像演技ワークショップ実践の様子